

随想



住まい考

丸山定巳

団地の五階に住みついでかれこれ四年近くになるが、いっこうに今の住まいに「なじみ」の感情が生まれてこない。持ち家でないからでもあるが、かといつてどこかに転居するといった当てもないのに、いつまでもほんの「仮の宿」といった気分がぬけない。

生活の便利さの面では、それほど支障があるわけではない。むしろ、機能的につくられているから生活していくうえで効率はずばりよい。間取りや設備は無駄なくコンパクトにセットされているから、掃除の手間もかからぬし、維持にそれほど気を遣うこともない。外出する際も、あちこち戸締りに気を配る必要もなく玄関の扉だけで用はすむ。

それなのに、生活が根付いてこないのは、どうも住む者の性に合っていないが、どうも住む者の性に合っていないから、合理的に設計されお膳立てされているから、ほとんど住み方に工夫の余地はない。設計者の意図通り、皆んなが同じところに冷蔵庫や洋服ダンスを置き、テレビを据えて楽しむということになる。外観からとらえられる差異も、わずかにベランダに置かれた植木や洗濯物ぐらゐというところで、あまり個性を出し方がない。つまるところ、部屋番号だけが違いを示すだけということにもなってしまう。

このように生活の容器である住居が画一化してくると、人々の意識や生活の中心までさらに画一化が進行する。もともと住まいが規格品であっても、それが柔軟性をもっているなら、おのずと住む人の人柄も染み出てくるだろう。しかし、最近の住宅は堅構造であるからその可能性も少なくなった。しかも世の中が不用品になつてきたためか、閉鎖的な構えが多くなり、プライバシーの確保には好都合だが内から外への表出が閉ざされてきている。

補助教員になつて

松野 博子

二十二年間の教員生活を辞して今年は五年目になる。私が退職した昭和四十四年の春は私一人として家族四人がそれぞれに新しい道へと出発した年でもあった。主人は現職から教育事務所へ転勤、長女は熊本市内の高校から東京の大学へ、長男は熊本市内の高校へそれぞれ入学し、主人と私は小国から宮地へ転居した。

二十二年間苦勞でした。これからは気楽に体を休めたい。と家人に勞われその気になった私は、教職という責任から解放され精神的自由を満喫することになった。しかしその解放感と自由な生活はやがて張り合いのないつまらなさになつてきた。暫らくして編み物を始めそこに喜びを味わうようになった。そんな時、そう辞めて半年位経った頃、在職中世話になつたM校長からM小学校の産休補助として勤務して欲しいと言ふ話があつた。私は嬉しい反面約半年間のプランクで不安があつた。それ以

上に私の心には一度辞めた者が……と言ふコンプレックスもあつた。しかし意を決して再び先生と呼ばれてから現在まで小中学校合わせて八校に勤務し現在もある小学校の三年を担任している。

主人と二人暮らしの私はよく学校の仕事を家に持って帰り採点や原紙きりや計画をたてる。そんな事は少しも苦勞とは思わない。その様子を見る主人から「勤めている時の君は水に放した魚みたいだ。」と言われる。私自身もそう思うし子供達から「先生」と言われるとつい数年前の教師になりきってしまうのが不思議である。

一度退職し再び教育の場に立つ身となつて初めて私はしみじみと「教師という仕事」を客観的に見ることができた。「先生はいつも活き活きしているね。」と言われる原因は、先ず、与えられた短かい期間をいかに効能的に学習を進められるかという指導法を真剣に考えなければならぬこと。

次に、一人一人の子供を一日も早く知るためには学校生活のすべての面で行動を共にしなければならないこと。そして、家庭との連絡を密にし子供を通して全面的に協力を求めなければならぬこと。

以上は教育上の根本的問題で何等ごと

一般の一戸建ての場合は、それほど極端ではないが、工場生産の画一化された建材が普及するにつれ、やはり家々の持ち味は失われてきているようだ。これまでみられたローカルな特色も次第にうすれてきた。田舎の自然の中に派出な色瓦屋根が点在するといった風景がそここ

もつとも、最近の住宅事情はそんな悠長なことを言っておれぬほど深刻になつてきている。趣などといった以前に、とにかくどんなものでもまず住む家を手に入れるのが問題という現状にあつては、これでもいたしかたないということになるのであろうか。

(熊大法文学部助教)

珍らしいものではないが補助教員という立場から考えると正担任とは違つたものであることを痛感する。それは任期満了で正担任教師にバトンタッチするに当たりその間の責任を完全に果たすことが出来たか、又残りの指導法でやつて担任は困らないかなど、留守をあずかる者の心配があるからこそ僅か二、三か月間で一年分位頑張る気持ちで真剣に子供と取り組んでいるような気がする。それでも子供達と別れる度に後悔しているのが実情である。

ともかく五橋遊覧とかのしゃれた船で三角港に着くまでは、素晴らしい二泊三日でした。ところが三角駅に上つたときから、少し様子がおかしくなつてきました。駅頭には夏のバカンスをそれぞれに終えた客が溢れていました。この分では汽車に積み残されそうなので、発車までまだ間がありましたが、大事をとって私たちは改札口の手前から二列に並びました。凄く暑い日で、みな汗をたらたらたらしながら辛抱強く並びました。ところが改札が近づくと又事情があやしくなりはじめました。今まで待合室や外の日蔭で談笑していた人たちが、中学生と見くびつてか列の中にわりこみ始めたのです。格好の立派な紳士やスマートな婦人、それに若い女たちのグループまでが、抵抗のしかたを知らない中学生の列にどんどんわりこんでくるのです。

この夏の出来ごと

美村 幹

Tさん。この夏、私は男女合わせて三十名ばかりの中学生と、天草の離島で二泊三日のキャンプをしました。熱を出す生徒がいり、豪雨に見舞われたりして、少し気苦勞はしましたが、大層楽しいキャンプでした。

どういふことでそう楽しかったのか、ここに詳しく語れないのは残念ですが、

改札が始まると大混乱です。奔流です。窓からどきどき荷物を放りこみ、うまい具合に席にありつける連中もいましたが、私はもう奔流のままに列車にどんどん押しこまれていくばかりです。押し流されながら私は、ふと奇妙にエアーパーツにでも落ち込んだような空間に放りこまれました。それが何とグリーン車という奴でした。まだ空席があるし、そ

れにすうすうと少し涼しい。ここなら余分な金を少し出しても幸運にありつけた気持ちで吐き出す席をとりました。汽車が動き出しました。すかさず這入ってきた車掌さんは心得たもので、この車はグリーン車で熊本まで別に九百円。……九百円ときいて今まで落ち着いた私の腰が反射的にピクンと飛び上りました。見栄えは無敵よくありませんが、九百円也を節約するために普通車の方に帰る他はありません。ところが、その入口ときたら万十の押し潰されてはみ出た顔みたいの人がつまつて帰るに帰れないのです。しかたがないので私も顔になって入口の人たちにくっついて立っていました。車掌さんは切符切るのに忙がしい。しかしそれがなれば程までいったところで、大きな紙入れを出したサングラスの中年の男が聞こえよがしに言いましたね。……入口がしまらんで冷房が効かんじゃないか……追い出して閉めろ……。Tさん。それでもいつだって私は庶民の陣営にいたい。でもこの頃その庶民から下へ下へこぼれ落ちていく自分を感じます。こうなつたら寂しいですが、いっそ下へ下へ落ちるところまで落ちてみようという気持ちにさえなっています。なにそこにあわよくば母なる大地、詩の泉があるかもしれないから。……

(叙情同人)